

海外提携 研究機関訪問報告

中国上海・華東師範大学訪問報告

後田多 敦
(非文字資料研究センター研究員)

非文字資料研究センターの小熊誠センター長と須崎文代研究員、後田多敦研究員の3人は2019年3月21日から23日、上海を訪問した。目的は、非文字資料研究センターと学术交流協定を結んでいる上海・華東師範大学中国非物質文化遺産保護研究中心で、今後の交流の確認と新たな協定書を交わすこと。華東師範大学で窓口機関の組織替えや、交流を中心的に担ってきた陳勤建先生が定年退職したこともありこの時期の訪問となった。

非文字資料研究センターと華東師範大学との学术交流は2004年12月に遡り、当時の福田アジオセンター長と華東師範大学中国民俗保護開発研究センターの陳勤建代表が学术交流の協定を結んだことに始まる。2013年に協定書を更新したが、その後中国民俗保護開発研究センターの組織替えなどがあり、改称や代表交代がなされていた。この機会に、華東師範大学の教員・研究者との関係構築を含めて、非文字資料研究センターと中国非物質文化遺産保護研究中心との間で改めて協定書を交換することになった。

訪問日の3月23日は上海到着後、華東師範大学を訪問する予定だったが、飛行機がトラブルで羽田空港に引き返し、別の飛行機に乗り換えて再度出発するというアクシデントがあったため上海への到着が大幅に遅れた。中国非物質文化遺産保護研究中心を訪問したときには夕方になっていたが、院長の張建民先生や教員、非文字センターへの派遣経験のある学生が待っていてくれた。陳勤建先生もわざわざ同席し、協定書の内容などを確認した。学内の正式手続きを経て、正式交換を行う。

意見交換の場で小熊誠センター長は、中国非物質文化遺産保護研究中心の張建民院長にこれまでの交流の経過や実績などを説明し、交流を推進してきた陳勤建先生への感謝の気持ちも伝えた。小熊センター長は、華東師範大学からこれまで10人の学生が非文字資料研究センターへ派遣され、日本での研究を行ったこと、また神奈川大学からも2人の院生が派遣されたことを説明し



写真1 中国物質文化遺産保護研究中心で陳勤建先生(右から2人目)と。



写真2 姚美玲先生、張建民先生、陳勤建先生、小熊誠センター長(前列右から)。

華東師範大学からの派遣生	
年度	氏名
2009	潘 倩菲
2010	姚 美玲
2011	趙 李娜
2012	霍 九倉
2013	沈 梅麗
2014	楊 陽
2015	蘭 曉敏
2016	黃 亜欣
2017	梁 珊珊
2018	王 躍

た。その上で、今後は学生だけでなく教員・研究者レベルでの積極的な交流を行いたい旨なども伝えた。

中国非物質文化遺産保護研究中心の張建民院長は、これまでの交流を踏まえつつ、新しい視点や分野での交流にも取り組みたいと話した。

同席した姚美玲先生は2010年に非文字資料研究センターに派遣され、21日と22日に案内してくれた院生の黄亜欣さんと梁珊珊さんは2016年と2017年にそれぞれ非文字資料研究センターに派遣され研究した学生である。



アクシデントもあり、短時間の訪問・交流となったが、交流を維持継続するための努力の必要性を再確認させられた。学术交流の経験や経緯を知る教員がいなくなると、関係が希薄となる可能性があった。陳勤建先生は意見交換会にも参加してくれ、さらにその後は懇親会も主催した。今後の交流継続のためには、教員間の学术交流や定期的な訪問を通して、関係の意義を再確認していくことの必要性をあらためて感じた。くわえて、神奈川大学側院生の派遣など積極的な取り組みの必要性も痛感した訪問だった。

*

24日は上海でのフィールドワークを行っている須崎文代先生の案内で、華東師範大学の院生黄亜欣さんと梁珊珊さんにも加わってもらい、旧租界地や魯迅博物館などを訪ねた。私自身は上海には過去に一度、調査ついでに立ち寄っただけで、初めてのよう状態だった。興味深かったのは工学部建築学科などでフィールドワーク実習の実績のある須崎先生のコース選定。まず、パノラマで仮想的に上海市全体を俯瞰できる「上海城市規画展示館 (Shanghai Urban Planning Exhibition Hall)」を起点とし、上海市の全体像を立体的にイメージすることから始めた。地図上だけではなく、パノラマで俯瞰することで自分なりの具体的な土地のイメージが持て、その後の散策に役立った。

人民広場や租界時代の建物などを見学した。上海の旧租界地区は、いろいろな視点で学べることを確認した。上海といえば、「魯迅」ということもあり、今回は「魯迅故居」「魯迅公園」「魯迅墓」「魯迅記念館」も見学した。

私自身の研究テーマ（19世紀末からの「琉球救国運動」）に引き付けても、上海は気になる場所でもある。琉球救国運動の中心メンバーの国頭盛乗（毛精長）＝最後の進貢使、伊計大鼎（蔡大鼎）＝通訳、名城世功（林世功）＝通訳・琉球国最後の国子監留学生＝らが、北京へ向かう途中の1879年8月17日（旧暦以下同じ）に上海に立ち寄っているからである。国頭らは8月14日、福州・琉球館を出発し、輪船「海定」で海路上海へ。8月17日に上海に着し「義和店」に宿泊。翌日に上海を離れている。そして、李鴻章に対し支援を求めため天津に滞在していた旧琉球国幹部の幸地朝常（向徳宏）と、27日に天津で会っている。国頭らはそこで、日清間で「琉球分割」の交渉があること、米国前大統領のグラントが仲介していることなどを聞いた（蔡大鼎『北上雑記』）。



写真3 旧英国領事館



写真4 旧英国領事館邸

そのグラント前米大統領は国頭らが上海を訪れる少し前、上海に立ち寄っている。

その直前に完成した建物が現存している。外灘の一番北に位置し、外灘で一番古い建物の旧英国領事館。英国領事館は1872年、領事館邸は1884年の竣工。そのかつての英国領事館（写真上）や領事館邸（写真下）の建物が今でも残っている。旧英国領事館は近年リニューアルされ、中に入れるようになっている。

旧英国領事館の建物は、もしかしたら国頭盛乗（毛精長）、伊計大鼎（蔡大鼎）、名城世功（林世功）らの「目撃者」だったのかもしれない。そんなことを考えながら、かつての旧英国領事館の建物の中でみなさんとコーヒーを飲んだ。ちなみにそのころも上海にあった『申報』は幸地朝常らの行動を正確、かつ詳細に報じている。

私自身は残された資料が少ないテーマを扱っているので、歴史の現場である「場」の持つ「資料性」ということを考えている。国頭盛乗や伊計大鼎、名城世功、そして幸地朝常らはどのような空間の中で、どのように移動しながら何を考え活動していたのか。そして、そのときに何を見ていたのか。それは彼らの行動と思想を推し量る上で、大きなヒントを与えてくれるのではないだろうか。歴史と現代の街・上海はいろいろな想像力を引き出してくれた。課題を具体的に気づかされる一日だった。